

【鳥越】

これまでの話を簡単にまとめておきたいと思います。アラン・コルバンさんから、「水に対する感性の歴史」という報告を受け、私達は大変幅のある水の捉え方を学びました。これは、単に頭で学んだだけではなく、本当に気持ちとしてそうだなと思える具体的な例を出して教えていただきました。

それに対し、高橋先生から反省として、私達は振り返ってみると、日本人は本来もともと深い感性を持っていたのにもかかわらず、明治以降の近代化の中で感性が弱まったのではないかというご指摘がありました。そして、「鋭い感性」をどう取り戻していくのかということも述べられました。これは大変難しい問題なのですが、確かに、ご指摘の通り、弱くなってきたということは事実だと思います。したがって、一步一步なんとかするには単なる行政任せではなく、行政とも、ある時は協力、ある時はケンカをしたりしながら、良いコミュニティが作れる時が来ているのではないかと思います。

そして、テーマ発表では、陣内さんから「蘇る水」を狙いとして様々な図を見せていただきました。地域がいろいろな要素を持っており、コンパクトシティとして魅力的な要素を昔から持っており、そのいろいろな要素に視点を定めることが、大切なことだと思います。

嘉田さんは「人と自然との距離」という問題を提示されました。特に、水の循環のコンパクト性については、し尿の排除と、し尿を受け入れると言う問題があります。おそらく、後ほど世界的な視野からお話いただけると思うのですが、なかなかおもしろい論理です。

また、沖さんは、「バーチャルウォーターの輸入の問題」について、ご指摘いただきました。「バーチャルウォーター」が、私達にとって特に新鮮だったのは、それを具体的な数字できちんと計算して出されていたことです。そうすると、いろいろな問題が出て、考える点が多々あるということを教えていただきました。

そして、最後は私から「川を利用するときれいになる」「利用するとコミュニティが充実する」「所有の逆転」という3点ほどお話をさせていただきました。

このようところで話が終わったわけですが、私達は、「里川」ということをなんとなくイメージでき始めましたし、「こうしたら新しいまちづくりや、新しい自分達の生活空間が作れそうだ」、「今までと違う方向がありそうだ」と言える所まで来ているのではないかと思います。

それでは、3人のパネラーの方に、十分に伝え切れなかったことや、他の3人の話を聞き、「これは一言いわなくてはいけない」と思うことなどなんでも結構ですので、最初に1人ずつお話をさせていただきたいと思います。

コンパクトシティは歩くこと

【陣内】

里山に対して「里川」が問題になっているわけですが、ずっと東京の歴史や景観、生活空間の変遷などを調べ、景観工学を提唱している樋口忠彦さん(京都大学)と、若い頃からずっと一緒に研究してきました。彼は、ずいぶん早い段階から日本人が好むところは、山の辺と水の辺で、この両方を持っている所が日本人にとって理想だと言っていました。それを、東京に適応しながら、随分一緒に調査をしました。東京の中で非常に親しんできた場所、つまり日本には名所という考え方がありますが、ヨーロッパの人は、パリやロ

ーマ、ロンドンも建物(モニュメント)が都市の歴史を象徴するということが非常に強いと思います。もちろん、川や丘などもありますが、我々にとっては、場所、名所というものが非常に重要で、江戸から伝わっている山の辺、水の辺を含んだ良い場所がたくさんあります。東京は、生活空間としてもそうだと考えます。

そして、先ほど、モザイク上の東京の地形と、その中に川がたくさん入り込んでいる様子を紹介しましたが、根津や麻布などあちこちにコミュニティがありました。郊外まで広げてみると、私が住んでいる阿佐ヶ谷や世田谷や練馬にもあります。例えば杉並区には、川が4本もありました。今でも3本あります。妙正寺川、善福寺川、神田川です。1つの区に3つも4つも川が流れており、それぞれの生活圏を持っているというのは、驚くべき資源、財産、歴史ではないかと思います。川添登さんの『東京の原風景』をご紹介しましたが、「東京は世界最大の村落である」と外国人から言われてきました。「それでいいではないか」と思います。外国人が東京を称して、世界最大の村落であると言ったわけです。つまり、都市としての資格に欠けませんが、自然はたくさんありました。

もっと詳しく見ると、東京はたくさんの村から集まっている巨大な村落です。それを逆転してみれば、独特な人間と自然が密接な結びつきを持って育んできた都市文化なわけです。ところが、その良さも悪さも消し飛んでしまうくらいに、都市化が進み、あるいは市街化が進んで自然が見えなくなりました。川は汚れてしまい蓋をし、山は削られ、景観上も本当は7つの丘がありローマやイスタンブールのような山の手で、しかももっと緑に溢れていたわけですが、それが見えなくなったわけです。それをもう1回見えるような都市にしていかなければいけないと思います。

それは、まずは物理的に見えるというよりは、心理的、あるいは精神的、心の問題としてそれを見えるようにしていかなければいけないと思います。実際、川を巡る東京での活動も、今日も何人も活動を引っ張っていらっしゃる方が来られているのですが、本当に眼を見張るような活動が進展しているように思います。このように見ていくと、『谷根千』という森まゆみさん達が出している地域雑誌の運動で、ミツカン水の文化センター発行の『水の文化15号』にも出ているのですが、東京の中にそのような地域がたくさんあります。その地域を掘り起こしていくと、必ず川が出て来て皆想いをこめています。森まゆみさん達が、自分達の機関誌を発行し取材に回った時に、まずみんなが一緒に言ったのは、藍染川への思い出でした。

藍染川というのは、永井荷風も言っているのですが、大正の頃には汚れた川でした。そして、昭和初期には暗渠になってしまいました。それでも地域の人達は、想いを持って語っていたわけです。だから、第3号で特集を組んだそうですが、そのくらいにもう1回地域を思い出す、そして根を下ろすべきだと思います。

また、東京の中でもゆったりとした時代になれば、必ず自分の地域をよく歩いたり、楽しんだりもう1回掘り起こし、川だけではなく歴史の記憶などの充実感を感じるというように、絶対になると思います。

「東京の中での地域」は、非常に重要になっています。全国的には東京は1つに見えるかもしれませんが、実は東京という多様な地域があり、豊かな場を育んでいるはずで、その1本1本が持つ記憶などを掘り起こしていく必要があると思います。

【鳥越】

今、東京は緑が見えなくなってしまうというご指摘がありました。それを見えるようにするには、どうしたら良いのでしょうか。

【陣内】

まず、実際に歩いて感じることです。やはり、イメージの上では見えないと思います。地下鉄など、交通の移動手段が、まさに見えない形になっています。実際に歩くことです。先日も神田川沿いを歩いたのですが、すごくたくさんの緑がありました。また、私達は川の問題というと、船で回ります。今まで、30回、40回と神田川、隅田川などを回り、外国から友人が来ると、必ず船に乗って回るのですが、みんなが全然違う都市の見え方がすると言います。やはり、体験することです。先ほども鳥越さんのお話で、神戸の川に子供達が入っているということは素晴らしいと思います。善福寺川でも、同じようなことをやったことがあります。それと同時に、大人が川を船で回るという体験も貴重だと思います。

先日も、ある研究グループとビデオを作ろうと船でぐるっと周り、情景を解説して描写したのですが、そのような経験をする人は、都内に住んでいる中でも限られていると思います。本当に気持ちがエキサイトしてくるわけです。このような体験を、大勢の人が共有することが大切だと思います。花火や花見などの点では、皆さんエンジョイをしているのですが、東京のような巨大都市でも、緑と水がわかるような経験が絶対できるはずですよ。

【鳥越】

これは、凄くおもしろい指摘ですね。シンプルですが、聞くとなるほどだと思います。歩けばいいですね。

【陣内】

コンパクトシティというのは、まず歩けということです。また、自転車もあります。海外の留学生が来ると、みんな自転車に乗ります。東京都内、かなりの距離を自転車で移動します。そうすると、起伏やいろいろな風景、人の生活の雰囲気もよくわかります。コンパクトシティの最大の条件は、これだろうと思います。

東京は大きすぎるのですが、1つ1つの生活エリアにコンパクト性が出てくれば、愛着を持ち、根を下ろして自分の存在をそこに投影する、つまり単に都心に働きに行くとか、通学で遠くいくのではありません。私も、今までは地域にあまり関わっていませんでしたが、最近阿佐ヶ谷という場所にこだわり始めました。そして、この間地元の個人誌を通じた町の読み取りの講演をしたら、ものすごく共感してくれる人が多かったのですが、なんとなくしか皆わかっていなかったもので、やはりまず体験だと思います。

【鳥越】

先ほど、多くの人が歩き始めたら、歩く眼から緑などが見え始めるが、今、我々の川や緑を見るのは、電車や車からの眼だということですね。大変おもしろいご指摘だと思います。では沖さん、お願いいたします。

里川のエロティシズム、人と人の関係を映す里川

【沖】

現場を歩け、というのは高橋裕先生の教えで、河川工学は書物を読むと学べないと本に書いてあるので、ではどうすればいいのかということになるのですが、歩けということで、私もよく歩きます。

本日、アラン・コルバンさんの話を聞き、その後の我々の報告を聞いて、1つ日本人が里川と聞いて抜けていることがあるのではないかと思います。それは、大人の里川ということです。もう少し言うと、エロティシズムというものに対して、里川は非常に無垢であるのではないかと思います。つまり嘉田さんの「洗濯をし、そこで水遊びをし、そして子供が利用する」、また鳥越さんの、「孫がおじいちゃんに会いに行く」というよう

に、美しいサザエさんの世界です。つまり、子供の頃の郷愁のパワーを取り戻そうということが、今、里川と我々が話すかなりの部分を占めている気がします。

しかし、水にはエロティシズムのイメージがある、ということに関しては、知らぬ顔をして通りすぎた気がします。例えば、柳の下に幽霊がいるのは、恐らくエロティシズムの1つの表れだと思います。個人的な話になりますが、ある土木研究所で勉強をしている時に、「沖君、昔は水車小屋というのがあってね、デートによかったんだよ」と、ある先生に言われました。最初は何のことがよくわからなかったのですが、歳をとってから「そういうことか」とわかりました。

このように、少しエロスというものに関しても、大人が里川に対して、子供を通じて自分の子供の頃を懐かしむだけではない楽しみ方や親しみ方があっていいのではないかと思います。もちろん、それだけにしろというわけでもありませんし、大人の里川と言ったから大人はエロスばかりだというわけではないのですが、この辺りをあえて避けて、子供を通じてだけではない大人の関わり方があっていいのではないかと思います。

もう1つは、里山の山を川に変えて「里川だ」と言いました。では、どうして里道はないのだろうか。里森はどうだろうか、と考えていくと、里商店があってもいいのではないかと。つまり、皆さんが郷愁を覚えるという、駄菓子屋があると思います。そうすると、それは里にあり、そこにいけば自分の欲しいものがなんでも揃っていたお店がある、このような里商店というものもあるだろう。もしくは、自分の心の風景になくはならない工場があっても、それがどんなに黒い煙を出していても、それは里工場かもしれません。それから、皆さんにも配られた『水の文化15号』にラーメン屋の話が出ていますが、24時間開いており、そこにいけばいつでもラーメンが食べられるラーメン屋を里ラーメン屋である、というように考えます。つまり、自分が日常生活の中で関わりを持って愛しているもの、それが自分だけではなくコミュニティとして大事に育てているものがたくさんあるべきであり、それがあって地域に対する愛着も湧くということだと思います。

その意味でいうと、里川の復権ということは、川だけではなくコミュニティそのものの復権であるし、川だけを良くしても里川の復権はできない、と当たり前かもしれませんが、そんなことを考えました。

それでは、里道、里森などいろいろな里があってもいいのに、どうして里川というものに対して、何か他と違うものがあるのだろうかと考えた時に、コルバンさんがおっしゃった中に、「水は物を映す」とありました。そうすると、里川もきっと何かを映しているのだろうと思います。では、里川は何を映しているのかというと、地域のコミュニティ、人と人との関わりそのものを里川は映すのではないかと思います。つまり、その川を見ると、その地域の人々がどのように水に関わっているか、お互いどのように地域の繋がりを育てているか、ということが映っているのではないかと本日お話を聞きながら感じさせていただきました。

【鳥越】

大変きれいにまとめて下さいました。次に、嘉田さんお願いします。

見ることの肥大、川の怖さ

【嘉田】

2点追加させていただきたいと思います。1つは、セーヌ川のところで言い足りなかったことがあります。日本も最近、ある意味似通ってきているのですが、水との関わりで「見る」ということが大変強調されています。ですから、パリ ビーチでも、あれだけたくさんの人が見に来るのですが、「水に触れるのは嫌だ」というように、見る事が強調されて直接触れることは嫌だということは、コルバンさんも書いておられますし、あるいは

マクルーハンなどは、「近代というのは視覚を強調する」と言っています。どうも見ることのレベルで関わる世代や層が増えており、日本もそうなりつつあるのではないかと。つまり触れずに見るだけで、どのように関わりが深まっていくのかということが気になっています。

また水の持っている怖さということをついつい忘れてしまうのですが、日本の川がこうなってきたのも、洪水が怖い、これをどうにか排除したいという思いが、行政だけではなく住民にもあります。したがって河川局への陳情は、水害のある地域が大変多いわけです。それに対して、高橋先生からもお話がありましたが、洪水はゼロにできないということが、果たしてどこまで里川思想の中に入り込めるのだろうかと思います。

水が溢れることも、場合によっては洪水を介して隣の集落と戦い、それこそ、[尾張三尺]のように堤防を、自分のところが危なかったら、相手の堤防を先に切るという話など、琵琶湖辺ではよく聞いています。そして、私の調査している村では大雨が降ると、村の役職の人が羽織袴を着て、つまりそれだけ正式なのですが、堤防を見回りに行き、いざ危ないときには相手側の堤防を切るわけです。その切り方も傳承されています。それは、鉄のパイプを堤防の中に入れ菜種油を流すと、ダダッと崩れて証拠が残りません。これは、明治、大正の時代のことですが、それくらい切実に自分の村を守るにはどうしたらいいかと考えていました。ある意味で、里川はこのような視点も一方で考えなければいけないと思います。このような洪水などの怖さと、どう向き合っていくべきか、今日是非議論していただけたらと思います。

もう 1 点は、実は先ほど「里川は英語で何と言うのですか」と聞かれたのですが、私は「英語でも“SATOGAWA”と綴ったらどうでしょうか」と申し上げました。これを、例えば neighborhood river とか、neighboring river と行ってしまうと、文化的色合いがなくなってしまうと思います。里山を撮り続けている写真家・今森光彦さんなどとお話をして写真集をつくったり、NHK の番組をつくった時も、「里山」を“SATOYAMA”でいこうということになりました。したがって、里川も“SATOGAWA”で素直に日本語でいく方がいいのではないかと思います。

【鳥越】

今、3 人の方が話されたことをいくつか、あるいはばらばらの指摘があったわけですが、1 つ印象に残るのは、「歩く」と言う言葉や、嘉田さんのご指摘である「見ることが増えてくる、他方触ることが減ってきた」ということがあります。

このことは、今まで私達は、人と里川の関係と言っていますが、人というよりも「身体と里川との関係」と見直した方が、もう少し深くなりそうです。「歩く」「見る」「触る」など、恐らくエロスとも絡んでくる可能性もありますが、このように身体と里川との関係という見方が可能だという気もします。

この後、皆様からご意見を言ってもらおうと思います。

【陣内】

エロスのことについて一つお聞きしたいと思います。沖さんが大変いいところをご指摘下さり、確かに子供のイメージばかり出てしまうという欲求不満がありますが、都市における川は、歴史的に見てみるとやはりエロティシズムというか、日本で言うと、花柳界や色町などがたくさん出てきます。それは、日本の文化史の中で非常に良いテーマだと思います。

例えば、それこそ藍染川という谷根千の活動をしているところには根津の遊廓があり、森まゆみさんのお話でも、その川沿いには非常に情緒溢れる色町の雰囲気があったそうです。先ほど出てきました麻布十番の古川や、王子の音無川沿い、そして隅田川も随分そのようなものがありました。また、京都の鴨川沿い

や金沢の浅野川、そして主計町というところにも木造3階の花町があり、今も健在です。やはり、そういう面も非常に重要であり、日本の社会回復の中で重要な暮らしで、色あせないことだと思います。

【鳥越】

そうですね。今の「身体の問題」が1つ。それから、沖さんはかなり過激なことを言われました。里道までは理性がある発言ですが、里商店や里ラーメン屋など理性を飛び越えているような気がするのですが、そのようなことまで行った時、2番目の問題として「里とは何なのか」ということは、もう1回考える必要があると思います。

そして3番目は、人と里川の関係という、どうしても「親しさ」にポイントを置いてしまうのですが、嘉田さんのご指摘にもありましたように、里川といえどもこれは「自然」ですので、川の怖さがあります。この怖さも、コルバンさんの流れに沿いますと、単に災害が怖いというだけではなく、様々な怖さというものがあります。もちろん、私達は災害の怖さというものは身に染みているのですが、もっと幅のある「怖さの問題」ということを、私達はもっと考える必要があると思います。

そして最後ですが、「エロスの問題」、これが意外とおもしろそうです。私は、コルバンさんの指摘で、自分自身はまったく真面目に生きているので、エロスを水に結びつける発想がありませんでした(笑)。ご指摘があつて、そうだ、言われれば水はエロスと絡んでいるということを感じました。そのことを陣内さんがより具体的におっしゃいましたが、「エロスで考えていったら、まちづくりはおもしろいな」というようにいろいろなアイデアがあります。

それでは、フロアの方々とお話してみたいと思います。

会場参加者との討論

【会場A】

女性と水の関係については、民俗学では常識でして、水を管理する、あるいは湖を管理する女の人が出てきます。これは民俗学者の折口信夫さんの『水の女』など、昔から言われていることです。泉というのは川に結びついていますので、「水の女」というのは1番最初に出てくる問題です。また、神話にも結びついています。

また、嘉田さんが距離の話がされましたが、前川という言葉が言われました。距離が自分のところに近いということで、感覚や感性の上でも、それを表すことは1つ大切な要素だと思います。

また、鳥越さんが言われる「利用」にも関連しますが、使い川という川があります。今は流れる川を川と呼びますが、その使い川や泉のことを川と言ったり、井戸のことを言う場合もあります。

また、陣内さんが水の辺、山の辺とおっしゃいましたが、私は、里川、里水を表している言葉があると思っています。それは「水郷」です。これは、水郷の大きな里という意味です。だから、水の里ということそのまま表しています。

私は、里川と聞くと、里芋と山芋というイメージになります。水郷という言葉が、今では限定されて使われていますが、もともとはもう少し広い意味がありました。ですから、川はいろいろな言葉で使われていたのですが、そのうちの川の中の川だけに使われるようになってしまいました。水郷もそうです。

私は、里川を聞くと里山に対する二番煎じで、陣内さんはインパクトが強いと言われましたが、私はインパクトが弱いと思います。小学生の時、学級新聞を作る時に新聞の名前をどうしようかと募集したら、朝日新聞に対抗して夕日新聞が出てきました。そのトラウマがあり、どうも好きになれない言葉です。

【鳥越】

ありがとうございました。とりあえず、里川という言葉は考え直した方がいいということでしたが、事実そうかもしれません。

【会場B】

今までの話は、コミュニティ性善論に立っています。コミュニティの構成員は、性善論者です。実は、現在我々が抱えている問題の1つは、所有権の問題にもつながってきますが、コミュニティの構成員の主権が強すぎるのだと思います。主権が強すぎて、コミュニティとして最も合理的な意思決定を下から行うということが、非常に難しくなってきました。

もう1つは、先ほどの高橋先生のお話は非常に興味深かったのですが、1897年から1930年代まで、日本の河川管理が中央集権的に一元的になされてきたのは、いい面もあり悪い面もあったと思います。河川に関しての管理権は、国が最終的に決定権を握っていると思います。何故こんな小さい川が一級河川なのか、と素人がびっくりするようなことがあります。河川に関しては、まだ中央集権制というものが、びくともしていいのではないかと思います。コミュニティ側の改革だけではなく、それに対応する行政側も川に関する管理権というものを、もっと分権化し下へおろしていくという問題が、今、現実問題としてあるのかどうか。

その点について高橋先生がご専門ではないかと思いますが、補足的なご説明を伺いたいと思います。

【高橋】

私見ですが、地方分権論に関連して、かつて河川審議会でも一級河川を減らし、つまり国の管理を地方に任せようという議論がありました。結果的には、あまり変化はないのですが、制度上はそういうことになりました。希望的観測は、多摩川が先駆者でしたが、流域委員会には地方自治体の長や、あるいは住民運動をやっておられる方や、いろいろな生態学者を含め、そこで議論することにより、その発言は昔に比べてずっと大きいので、それを通して地方の、あるいは地元の立場が反映されつつあると思います。

これは、実際に淀川流域委員会でご苦労されている嘉田さんに訊かれた方が、本当の実状がわかるかもしれませんが、実質上は、以前に比べれば地元の意見はかなり反映されるようになってきています。ただ、一級河川は国土交通省の管理になっているので、その制度は崩れていませんが、里川とどう関係するかはわかりません。しかし、そのような意見は、昔に比べればかなり反映されているようになっていて理解していますし、その傾向を強めるべきだ、というのが私の意見です。

【鳥越】

ありがとうございました。制度上はさほど変化はないが、実質上は都道府県、あるいは市町村に移行しています。実際は、それだけではなくその下のコミュニティも力を持っているところが出て来ており、地域によって差がありますが、方向としては、このようなことがあるということでした。

【会場C】

議論が、計量できる議論と計量できない議論とに分かれると思います。その意味で、例えば、沖さんのお話で、里川を計量できるバーチャルウォーターで、しかも食料などの統計値が得られるもので議論が進められますが、先ほどのエロディシズムの里川ということになると、バーチャルウォーターではどのように押さえるのでしょうか。

【鳥越】

これは、難しい質問ですね。この難しい質問を沖さんがどのように料理されるか、私も楽しみです。

【沖】

エロスの計量化は、難しいというのが簡単な答えですが、私がずっと胸に秘めていた想いは、例えば森林を守らなければいけないという議論をする時に、森林にはこれだけ効能があり、それをお金に換算にすると何千億になる、何兆円になる、だから守る価値がありますと言わないと、財務省が納得しないし国民が納得しないという論理が、いま合意になっています。あるいは、それは共同幻想かもしれません。私はそうではなく、森林がある方がいいと思っているから守りましょう、里川も、里川があることがいいから守りましょう、という論理に転換したいわけです。ところが、現在私は少なくともその方向での理論武装はできません。

例えば、河川局の人が「大事なのはわかるが、洪水になったら困るでしょう。水が使えなかったら困るでしょう」と言われた時に、「こういうメリットもあります」と言っても、「その効用がどちらが上か」と訊かれたら、やはりお金に換算する等ことでしか、なかなか比較できない。そうではない論理を本当は作らなければいけないと思います。それは、森を守ることや里川を守ることでもそうですが、その辺りをなんとかしなければいけないと思いますが、今はまだできません。私は、研究としては、まだできることしかやっていませんが、できないこともできるようになればいいと思います。

【鳥越】

確かに、「里川は良いからやろう」というのは価値観です。これは、誰にとっていいのかということです。荒っぽく言うと、コミュニティが判断すれば良い、という流れになっていますが、そうだとすれば、コミュニティが責任を取るという責任主体でもあります。従って、マイナスになったからといって、他に責任転換をしないという覚悟の上で、判断主体を持っていったらいいのではないかということが、基本的な流れだと思います。

また、先ほどフロアから、「コミュニティを性善論として考えているのではないか」という指摘がありました。ご指摘にあるように、コミュニティを構成する人々が私権、つまり自分の住宅地や田畑を持っており、そして自分の宅地は小さな面積でも減らしたくないと思われています。このように、利害関係のある人達が判断主体になった時に、これを素朴にいい人達という形で議論を進められるのかという問題だと思います。これが、先ほどの流域委員会の問題や実質上の問題に絡んできます。実質上は、より基礎的自治体、つまり市町村なり、コミュニティの方に権限が移動していつている地方分権の流れなどがあるのですが、このようなのかな考え方で本当にいいのでしょうか。

【嘉田】

先ほどの流域委員会ですが、日本の河川法を見ると明治 29 年に、人と河川の関わりを法律で決めるようになりました。それまでは、それぞれの地域社会で、あるいは江戸時代には藩で独自の河川のしくみがありました。それが、全国一律の中に入れていったのが河川法ですが、その時のメインの目的は洪水を減らそうという[治水]です。明治 20 年代にいろいろな洪水があり、その後、昭和 39 年の河川法改正で、この時代の高度成長の中で、どうやって水資源開発をするかという目的から[利水]が入ってきました。そして、平成 9 年に、1 つの時代の流れで[環境保全と住民意見の反映]というものが、法律に反映されてきます。この法律は、逆に後追いしているところがあり、社会の方があつる部分早く動いています。

典型的には、琵琶湖などは琵琶湖総合開発というもので、徹底的に琵琶湖に流れ込む 120 本の大きな川

は一級河川にし、地元の人がそれまで自分達の村として、それこそ大雨が降ったら堤防を自分達で見回りにいき、堤防が崩れそうになったら、まさに命がけで土嚢を積んでいたところが、「もう、あなたたちやってくれなくてもいい。国が全部やるから。一級河川指定するから」というのが、昭和 39～40 年の流れだったわけです。その時の一級河川指定の裏側の論理は、水をすべて国土交通省が水利権として掌握しながら、水の差配をしたかったわけです。その原理は、今も変わっていません。ですから、水利権というものが国によって、あなたのところは工業にこれだけ、農業にこれだけというところが変わっていないので、構造はあまり変わっていません。ただ、国だけではやり切れないというのが、社会の流れになってきているわけです。

つまり一旦は住民の手から国へ召し上げたが、国だけではやりきれませんでした。その 1 つは災害です。大雨が降った時に、国の役人や県の役人はほんの少ししか動けません。水害は一斉に[同時多発的]に起こるので、行政に連絡がきても対応しきれないわけです。したがって、現実的には大雨の時は、それぞれの目の前の川は地域の人達が見回りをしなければ対処できなくなっています。そのような現実があります。

またもう 1 つは、さきほどの鳥越さんの話しとのかかわりでいきますと[責任論]がかくれているわけです。公的には裁判です。国がやってあげますと言ったら、水害が起きた時は[行政の瑕疵]ということで、裁判で負けるわけです。また、住民も自分達の手から川の管理が離れてしまったら、裁判するしかありません。堤防を見回りに行けなくなります。見回りに行っても、住民が勝手にやっているということになります。その辺りのところから、改めて、自分達の川は自分達で守ってもらおうという流れと並行して、平成9年に河川法が改正されたわけです。

そこで、今各地でいろいろな流れがありますが、今日は「吉野川みんなの会」の姫野雅義さんが会場に来ておられますので、コメントしていただきたいと思います。みんな、国は地方分権と言うけれども、吉野川では簡単ではない、というような話も含めてお話しいただきたいと思いますが、今、淀川は、かなりうまく行政と住民とやろうとしています。というのは、先ほどの価値観が共通です。淀川の場合は、自分達にとって良い川を作りたいというようになっていますが、吉野川ではそのような状態になっていないので、よろしければコメントいただければと思います。

【姫野】

徳島から参りました姫野と申します。徳島では、吉野川の可動堰の建設問題で、3 年前に住民投票が徳島市で行われました。そこで、90%が可動堰建設に反対だという結果が出て、その 2000 年の夏に計画が白紙になりました。白紙になり、今現在どうなっているかという、いまだに可動堰計画についてはくすぶっています。白紙にはなっていますが、河川管理者である国土交通省は、この計画を中止にはしていません。1 番最近の国土交通省の見解をお聞きしたところによると、それでも地球は回っている、つまり必要であるという意見が、事務次官がおっしゃった最新の報告です。

一方、住民側はどうかというと、2000 年の住民投票で 90%反対になりました。実は、可動堰建設の原因になったのは、第十堰、地元では「だいじゅのせき」と言っているのですが、250 年前からずっと農業用水取水のために江戸時代に作られた古い堰があり、地域の人々にとっては、「お堰」というぐらいにデートスポットでありました。また子供達にとっては、そこで親やおじいちゃんと一緒に魚と取って遊ぶ場所でした。そしてお母さん達にとっては、洗濯する場所でした。そのようないろいろな思い出が、250 年間ずっと詰っていて積み上げられてきたスポットだったわけです。

今日、私は仕事を休んでここに来た 1 番大きな理由は、里川に惹かれたからです。吉野川は本当に大きな川で里川というイメージとは違うのですが、唯一吉野川の中で里川と言える 1 つが、第十堰の周辺です。

去年、国土交通省が、吉野川流域委員会準備に際してアンケート調査を行ったのですが、「1番好きなどころはどこか」というベスト3に、第十堰周辺が入っています。住民達は、白紙になった後に第十堰を、さらに250年、あるいは1000年、中国も都江堰という2250年も経った古い堰があるのですが、そのように使い続けていくことが、河川法が変わり住民が川をもっと身近に取り戻し、川との関わりを変えていく1番大事なことではないかと、第十堰の保全するための計画を作っています。

そのことに対して、行政がどうやって新しく関わってくるのか、是非今日何らかのヒントを知りたくて来ました。是非、皆様の中でこの問題に対してこうしたらいい、というお考えがあったら、お聞かせいただけたらと思います。

【鳥越】

こうしたらいいというお考えがあったら、ご発言お願い致します。

【コルバン】

私が申し上げることは、フランスのケースです。行政や地方公共団体が住民の意向に反した行政を行うということがありました。1976年に、沿岸の保護のための法律ができ、機関ができました。800kmに渡る湖の沿岸の整備のための団体ができ、800kmを公共のお金で買い、これを守るという政策が取られました。ですから、これは、地域住民の意向に合致した形で整備する、もちろんサステナビリティや環境保護などは、フランスでも重要なテーマになっています。

そして、その所有権を獲得したというだけでは十分ではなく、それを協力して整備していかなければいけないわけですが、このように公が800kmの沿岸地帯を購入したということによって、逆説的にも地価が下がりました。いろいろな圧力団体があったのでしょうが、地価が下がるというのは良い方向だと思いますし、公共の財産として800kmキロを購入したということです。

そこから28年経っているのですが、1つのこのような言わば国家、あるいは公共団体が住民の意思に反している施策を行う時の歯止めをかけるような1つのポイントに釘を刺していると思います。嘉田さんは、沿岸保護の保存のラボラトリーの活動についてはご存知だと思います。

【鳥越】

結局、公共空間を政府ではない公的な機関が購入する、あるいはナショナルトラスト的な組織が購入することにより、ある対応をするというのは、1つの道としてはありうるかもしれませんが、日本の河川の場合は、その道は比較的閉ざされています。しかし、この流域委員会やそれに類する組織体が、ある種の決定権に対して影響力を持ち始めています。したがって、これは基本的な所有論の議論になってくるのですが、あまり所有論まで持って行くとややこしくなるので、少なくとも決定権というところで見ると、今、変化を起こしています。

既存の公的な組織がある空間を購入する、というのは、日本のコミュニティは、行政は含まれませんが、フランスのコミュニティは行政も含まれた概念が多いからだと思います。日本では、市や町が購入するというイメージだと思いますが、それがしっかりしていれば、ある種の道はあると思います。

ただ、国有地の購入というのは有り得ないので、少し話しはややこしいのですが、財産区の問題などに対しては対応できますが、吉野川の河口堰等の問題は難しいと思います。しかし、それに代わる組織体が生まれつつあります。その辺りも含めて、嘉田さんにお話していただきたいと思います。

【嘉田】

まず、所有論の話をする日本の場合、もともと江戸から明治くらいは、私有の土地と幕府や藩の土地、そして村落の土地という二重三重の構造があったわけです。私有というのは、その中の利用権を中心に置いていたわけです。それに対して、明治期以降、国は利用権のみならず、処分、所有権というところまで、河川に官有地として設定してしまいました。いわばフランスの場合と逆でして、川や水域はほとんど公の土地で、住民が手を出せなくなっているわけです。一方、元来、村というのは、コミュニティ全体として、山も川も水田なども管理してきており、その差が吉野川の問題です。

これからのことを考えると、一方で住民の方も、雨の時の見回りも大変だし、草刈も大変だから国が面倒を見てくれるのは良いことだとひろい意味での所有の主張を手放してしまい、国に預けてしまった部分もあります。したがって、これから住民自身がどんどん関わり、まさに今日の里川として関わりながら、実は最終的には処分の部分も何らかの形で、住民の意見を入れていけたらということが、今日のシンポジウムの1つの行政的な狙いであろうと思います。

【鳥越】

今のお話は2つのことが言われています。一つは、現実には、法律が後追いをしていることが多く、現実の方が先に進んでいるということで、その通りだと思います。例えば、私は環境社会学者ですが、よく法律の人に呼ばれます。私から何の話を知りたいかという、法律というのは常に現実よりも遅れます。今、現実はどうな取り決めをしているのか、どのように変わってきているのかということ、社会学者から聞くわけです。このように取り決めをして、このように変わってきたという、それに合わせてどのような法体系が今の民法なり行政法なり、様々な法律と正誤関係を持ちながら、どんな法体系ができるか議論するのは、それが、法律に反映されていったりします。したがって、原理的に法というものは、後追いになる傾向が強いです。ただ、特にこの問題に対しては、現場の方が動いているということをご指摘になりました。

そしてもう一つの指摘は災害の問題ですが、災害はすべて行政が召し上げてそれを全部責任を持つという時代ではなくなり、それはもう難しいと認識され始めました。最近のわかりやすい例でいうと、阪神淡路大震災がそうです。災害が起こった、それを行政がすべて責任を負って「行政がしろ」と言ってもできるものではありません。それでは、災害とは何かという、ダメージを受けたものをどういう形で復元していくのか、更に言うと、かつてよりも、もっと良いものにしていこうという夢を当然持つため、行政は大きな役割を果たしますが、それをすべて行政に任せるのはもう時代には合っていないのではないかと思います。

この話は大変抽象的な話に留まっていますが、ただ現実が先を走っているという自覚は必要だと思います。それぞれの場で方向が違うので、その通り真似はできませんが、ヒントは持っています。先を走っているという自覚の大切さは、重要な指摘であったと思います。

【沖】

地方のことは地方で決めるということは、確かに今、良いことだという合意が得られ、移りつつあるところだと思います。しかし、例えば、最近出ている、ある党のマニフェストを見ると、「地方分権を進めます」と書いてあるにも関わらず、「第十堰は止めます」と書いてあります。第十堰を止めることは良いことかもしれませんが、中央がやると決めることも、中央がやらないと決めることも、これは地方分権ではありません。地方のことは地方で決めて下さいと書いてあれば、これは地方分権ですが、「やめない」と書いてあるのは矛盾があると思います。

姫野さんがおっしゃった「住民 90%」というのは、河川局の方に言わせる「母集団が違う」という話をされます。おそらく、治水ということに限って申し上げますと、被害を受ける方というのが非常に限られているというのが、今問題だと思います。つまり、集団を広く取れば取るほど、普段は楽しく川と付き合えますが、いざとなった時に被害を受ける人は、地形的に決まっており、特定の人が被害を受ける可能性があるわけです。ということは、その人達だけにアンケートを取れば、やはり治水が 1 番だと言うかもしれません。ところが、ある程度まとまったコミュニティでアンケートを取れば、「いや、そうは言うが普段も大切だ」と言った時に、どうやってその競り合いをマネジメントするかは、先ほどコミュニティの性善論というご指摘がありましたが、確かにその通りで、上手くいく例ばかりではないと思います。

したがって、「社会保障としての治水」はあると思います。しかし、トータルとしてみると、あそこが 1 番危ないを見た時に、全体と個人個人を立てられるか、まさにケースバイケースであり、まだまだ里川だから解決するか、地域が話し合えば何でもうまくという問題ではないと思います。

第十堰の問題に関して申し上げますと、実際に学生を連れて第十堰に行くと皆することがないので、靴を脱いでバシャバシャと歩き始め、水遊びを始めました。そういう意味で、ここが非常に好きな空間だということがよくわかる場所でした。そのようなところを、東京にいて何の利害もない我々が残すべきだとか、崩れかけているから直したいという技術者の気持ちもわかりますが、どのぐらいまで申し上げていいのかが非常に考えてしまうところがあります。ただ、行ったら魅力があるのは確かです。しかし、250 年とおっしゃいましたが、コンクリートが昔からあるわけではありません。逆に言うと、あそこに第十堰があるという情報は残りますが、材料としてのものはうまく入れ替えながら機能を残していくことができればいいのではないのかと思います。

【鳥越】

ありがとうございました。別の方のご意見もお聞きしたいと思います。

【参加者D】

今、地元の方というお話が出たのですが、先ほど陣内先生がコンパクトシティのお話で、地元の人が土地に愛着を持ち、川を守ろうという話をなさいました。私は、東京の川というのは、他の地域の川とは非常に違うと思います。なぜかと言うと、東京は、移民都市です。これだけ新しい建物が立ってしまうと、土地の履歴もないし、それを語る人間もいません。そうすると、嘉田先生が先ほど琵琶湖周辺で行ったアンケートすら行うこともできません。鳥越先生が下水道が川に変わったというお話がありましたが、あれはやはり揺るぎながらも、同じ地域に 3 世代の人間がいて、人の繋がりが川をきれいにしたと感じます。東京は、まず人の繋がりは非常に少なく、地元根ざしている状態も少ないと思います。

国立市に矢川という小さな川があります。そこは東京都の緑地として都の所有地になっているのですが、私が小さい時は、その川はどぶ川で、下水が流れ込み、ザリガニが豊富に取れて、私にとって最高の遊び場でしたが、数年経って行ってみると、全然取れませんでした。私が遊んでいた頃は、臭かったので人は全く集まりませんでした。しかし、下水を止めたら、一瞬にして非常にきれいな川になりました。そうすると、クレソンが生え、小さな魚が戻ってきて、近くの人がホテルを養殖したり、そのようなものが根づき始めて、どんどん人が戻るようになりました。

つまり、東京で里川というものを復活させるのであれば、水を手取り早くきれいにし、川がきれいになったことで、そこに人の繋がりが生まれていくようにも感じます。

【参加者E】

今日の話は大都会の里川、あるいは里山の話で、だんだん議論していくと地方の話に入ってきました。私は四国の愛媛なのですが、田舎の里川、里山、里道は荒れに荒れています。もし、大洪水があれば、大きな河川は全部砂で埋まってしまう。したがって、砂を取る時に全部コンクリートで固めてしまうわけです。そのような洪水の影響を受けない所は、荒れ放題の川になっています。更に悪い所は、溜池や、地下水、だいたい浄水は地下水から取るのですが、そうすると川に水が流れなくなり、川が荒れてしまいます。大洪水であまり荒れないところは、放ったらかしになっています。

大都会の里川も大事ですが、もっと地方に行くとこのような生活に密着した問題がたくさんあります。池では泳げない、川は荒れ放題で、水もチョロチョロなので泳げない、大きな川は全部コンクリートで固めている、というような所が、陣内先生の昔の川と今の川、沖先生のバーチャルな世界といった点で、少し地方の昔の里を取り戻すことを取り上げてもらおうと、もっと奥深い議論が出てくると思います。

【参加者F】

先ほど、里川は“SATOGAWA”と訳されるというお話がありましたが、コンパクトシティは、日本語でどのように訳されるかお答え願います。

【参加者G】

水を管理する女性に関連しますが、川にかかる橋も女性が必ず出てきます。橋姫伝説などもそうですが、もともと川を管理していた女なので、そこを通る橋にも必ず女の人が結びついています。川岸の柳に出てくる幽霊が男ではないということも、実はそういう背景があると思います。

【鳥越】

ありがとうございました。いくつか、ご指摘や質問がありましたので、最後は3人のパネラーの方に、お答えいただければ幸いです。

【陣内】

先ほど、東京は新参者が多いところなので、掘り起こしながら愛着を持って地域作りをするのは難しいというお話がありましたが、まさにその通りだと思います。私は、杉並区に住んでいるのですが、杉並区の行政も杉並の歴史に関心を持っていません。また、豊島区は景観の取組みをしていますが、23区山手線の内側は熱心です。しかし、杉並も調べていくとものごく歴史があります。だから、私は認識の問題が大きいと思います。杉並や小金井など、本当は歴史があるのですが感じません。その中に、川は非常に重要な役割をしていたと思います。

また、ヨーロッパの都市でも、郊外の都市のクオリティをもう少し上げるということを、1番のテーマにしています。都市計画上、城壁の内側の歴史的街区というのは、非常に魅力がありながら商業も活性化しており、もの凄く蘇っていますが、外側の郊外は大変つまらないのです。それを何とかしようということで、そこに込められてきた街の仕組みと地域の仕組み、自然の仕組み、古い道など、織り成されている風景を理解しながら、郊外もおもしろくしていこうということがあるわけで、我々東京も、それが必要じゃないかと普段を思っていたところに、里川のテーマが入ってきたのでお話したわけです。

また、コンパクトシティという言葉も、普段使っている言葉ではありませんが、行政や市民も使い始めてい

ます。文系の人達も、人口減少化時代、成熟化社会でコンパクトシティがこれから重要になるのではないかとこの認識が少しずつ出ています。そのような流れがあり、取り込もうと思ったわけです。

このコンパクトシティを日本語に訳することは、非常に難しいです。これは、みんなで考えていい言葉を見つけていきたいと思います。

【沖】

まず、田舎の里川、里道、里山が荒れているというお話がありましたが、放っておけば自然になり、いい環境になるというのがウソだという一つの例かもしれませんが、結局、人間にとって暮らしやすい環境は、自分達が常に手を入れてメンテナンスをしていかないと、すぐに荒れてしまうものであると思います。もしかすると、100年、200年放っておけばまたきれいな自然に戻るのかもしれませんが、それは人間が暮らしやすい環境かどうかかわからないと思いますので、ご指摘いただいた話はなるほどと思いました。

また、コンパクトシティと里川についてですが、今日お話を聞いて思ったことは、先ほど移民が多いという話もありましたが、結局、1950年の戦後の日本は、農村から都会へ人が出てくる大きな人口の移動がありました。私は、今となっては例外と考えるべきだと思いますが、その時は経済も成長し、人もどんどん変わり、親と違う職業に就き、親と違う生活をするという時に、田舎の家に対する憧れを持ってきてしまったわけです。それが、その田園的な暮らしであり、とにかく狭くてもいいから庭がある一軒家じゃなくては嫌だ、というように、小さい頃の思い出を引きずった備え方をしてしまったために、土地も足りなくなり、山手線の中でさえ低い家が並んでいるわけです。

しかし、都市に住むというのはコンパクトにした方が利便性も上がるし環境負荷も少ない、農村の面影を引きずらないで、このような都市の住まい方はこうしてみたらどうかという提案が、コンパクトシティではないかと考えます。

その面で言うと、都会に来ると自分が管理していない水は何をしてもいい、どんどん流して他の人に任せるといった考えが、都市に来た時の妄想を引きずってきた態度だったと思いますが、そうではありません。都市に来たら、都市なりの水に対する守り方があるわけです。それを言っているのは、里川であるというように、私の中では今日のお話で整理されましたので、都市に住む時の住まい方はコンパクトシティ、そして都市での水の付き合い方は里川というように、並列して考えたらどうかと思います。

【嘉田】

今日は一つ「感性」というのがキーワードだったと思いますが、日本の社会科学でも、この主観客観論争というのは大変長く、あくまでも様々な公のことは客観的に決められなければいけないということで、行政も公正性、平等性とセットで作られ、それがここ数十年の日本を支配してきたと思います。その典型が、バーチャルウォーターの論理です。バーチャルウォーターだけを言っていたら、沖さんは官僚的客観的志向の権化のようなところでしたが、その後ろで、やはり世界中で困っている人がいれば、その人達は何らかの手を差し伸べたい、これは論理ではなく好きか嫌いか、自分がやりたいかやりたくないかというところに自分の意志が出てくるわけで、そこに感性が入ってくると思います。

日本の農村は、コミュニティ性善論ではないと先ほどお話が出てきましたが、私も性善論ではないと思います。日本の農村の論理は、大変経済合理性が徹底しています。そして、他者に合わせるという社会的合理性が徹底しています。私がよく知っている村で、平成元年に河川改修をする時に、それまでかなりクネクネと曲がっていたところに洪水のためにコンクリートにしようしました。その村の議論の中で、私の友人が

「コンクリートにしたら、ホテルが出なくなる」と言っていました。では、そのことを寄り合いで言ったらどうかと言ったら、「いや、そんなことを言ったら、あいつは女々しい奴だと言われる。洪水よりもホテルが大事だと言ったら、村の中で生きていかれない」と言い、コンクリートの川ができたわけです。そして、同じ人が「やはり、あのコンクリートは間違っていた。下だけ掘り返してホテルを取り戻そうか」と言っているのです。

つまり十数年経ち社会の流れが変わり、彼自身がそのように言ってもいいと周囲を見始めたわけです。だから、周囲との関係性の中で意見を調整していると言う原理は変わりませんが、周囲が変わったわけです。

したがって、今回のシンポジウムでも、「感性」の部分から変えていき、それを言ってもいい社会的風潮が作れるのが良いのではないかと思います。

【鳥越】

どうもありがとうございました。里川は、とても魅力的ですが、「何か」といったら、一番初めの次元では、川にもう一度文化を取り戻そうということですがここが難しいのです。その通りなのですが、では文化を戻すとは何を戻せばいいのかという時に、私達は川から文化を外してきた歴史がありました。それに対して、着物や車などはデザインを含めていつも文化を考えています。着物と車に文化を考えたのは、商品だったからで、買いたい人は買って買いたくない人は買わなくていいという選択ができたわけです。

ところが、川に文化を与えるといった時に、そこに住んでいる住民は選択できません。これは決定的な意味があり、選択できない時にどうするかというと、結局そこに住んでいる人達1人1人から立ち上げていかなければいけないと思います。1人1人の持っている記憶や思い出などを含めた文化総体として、それを含みこんだ形でつくらねばならないという方向性が出てきたところですが、どうしてもそこに住んでいる1人1人が持つ文化、そしてコミュニティが持つ文化から考えますので、全員が納得するわけではないにしても、ここで文化を作るんだという方向性だけは出てきたと思います。

今日の試みは、ほんの一例にすぎませんが、おもしろい刺激があったかと思います。ほとんどすべての方が、途中で帰られることなく興味を持って聞いていただいたことは、大変うれしく思っています。コルバン先生を始め、諸先生方、そして会場みなさま、本日はどうもありがとうございました。